CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Gunma University Academic Information Repository

育英短期大学研究紀要　第30号　（2013年３月）

異文化共生社会への居住が現代青年に及ぼす影響
―― 異文化への態度と友人関係からの検討 ――

泉　水　清　志[1)]・小　池　庸　生[1)]

Influences of Living in Different Cultural Symbiotic Societies in Modern Adolescence : Examination from Attitudes Toward Different Cultures and Friendships

Kiyoshi Sensui and Nobuo Koike

Abstract

The purpose of this study is to examine how living in different cultural symbiotic societies influence on modern adolescence by measuring attitudes toward their own country and others, consciousness of different cultures, friendships, and motivations of them. Subjects of this study were divided into two groups: junior college students from Gunma prefectures, and students from other prefectures. Results showed that living in different cultural symbiotic societies promotes the receptive attitudes toward different cultures, contacts and supports in particular, but consciousness of different cultures was lower. And results showed that living in different cultural symbiotic societies promotes friendships and motivations. We suggest that cultural construction of self and integration in acculturation influenced them.

keywords : different cultural symbiotic societies, cultural construal of self, Gunma prefecture, receptive attitudes toward different cultures, friendship
キーワード：異文化共生社会，文化的自己観，群馬県，異文化受容態度，友人関係

1．問　題

1）文化が自己に与える影響

人は、自分自身の生きている環境が価値づける特徴によって自己を理解している。実際に今生きているこの世界は、人間とはどのようなものであり、どのようなものではないかという枠組みを与えてくれる。この世界から受け取るさまざまなメッセージを選択し、統合や組み立てによって過去や現在、将来の自分を理解し、そのメッセージによってこの世の中のさまざまな問題、人間のあり方や生き方などが顕在的または潜在的に伝達される。自己は社会文化的文脈の中に埋め込まれており、家族や友人など重要な他者との密接な相互

1）育英短期大学現代コミュニケーション学科

作用を通して確認していく。この相互作用によって、人は社会における成員性を自己の属性の１つとして認識するとともに、誇りや愛着、恥ずかしさや嫌悪などの感情を生起し、社会的アイデンティティを獲得していく。つまり、人がどのような社会や文化に誕生して存在するかがアイデンティティの形成に大きく影響を及ぼすのである。このような相互作用は、社会文化的、歴史的文脈の中におかれた地域社会や経済階級の文脈の中で展開されている。

心理学において、人間行動についてのさまざまな法則が発見され、人間の「普遍的理論」が確立されてきたが、近年では理論からの予測とは異なる結果がみられるようになってきた。その原因の１つとして、それぞれの社会で共有されている文化的自己観の違いがあげられる。文化的自己観とは、ある地域やグループ内で歴史的に作り出され、暗黙のうちに共有されている人の主体の在り方についての通念のことである。北山（1998）は、欧米と東アジアの間には、それぞれの社会で通用している文化的自己観に根本的な違いがあることを指摘している。欧米社会では、人の主体、すなわち自己とは他の人や周りのものごととは区別され独立した存在であるとする相互独立的自己観が優勢である。そのため、自分が何者であるかという自己定義は、「陽気な私」であるとか「頭のいい私」というように、自分の能力や才能、性格など周囲の人々や状況から独立した内的属性に基づいて行われる。一方、日本など東アジア社会では、自己とは他の人や周りのものごとと関係性をもった存在であるとする相互協調的自己観が共有されている。そのため、自己定義は「○○大学××学部の私」であるとか「友人の前では明るい私」というように、その人が関わる人間関係そのもの、あるいはその関係性の中ではじめて意味づけられる自分の属性によって行われる。

この文化的自己観の違いは、認知スタイルや行動パターンの文化差につながっている。たとえば、欧米では人が何らかの行為をしたときにその原因を態度や価値観の反映であるとみなす「基本的帰属のエラー」がみられる。これに対し、東アジア社会ではこのような現象はみられず、内的属性よりむしろ周囲の状況が原因だと判断する傾向がみられる。このように、相互独立自己観が共有されている欧米社会では自己の行動は自己の内部によって決まると考えるのに対し、相互協調的自己観が共有されている東アジア社会では自己の行動は他者との関係の中で決まると考えるのである。また、欧米では自己の成功を自分の内的要因、特に能力に帰属させる一方で、自分の失敗を運や課題の難しさなど外的要因に帰属させる「自己高揚バイアス」がみられ、自分を実際よりも有能であると認識する自己高揚傾向が存在する。これに対し、日本では自分の成功は運や状況といった外的要因に帰属させる一方で、自分の失敗は能力や努力など内的要因に帰属させ、自分の価値を減じるような自己批判的傾向が強い。これは、相互独立的自己観が共有された社会では自分の内に誇れる属性を見出し、それを外に表現しなければならないのに対し、相互協調的自己観を共有した社会では周囲の人々からの期待に沿って自分の欠点を改善していくため、自分の至らない点を反省するために生じると考えられる。もちろん、日本においても「自分が成功したのは自分が努力したためである」と自分の成功を内的要因に帰属することもあるが、それは日本社会が重視する努力が実際に反映されていることが多い。すなわち、欧米社会では個人の中の優れた資質を現すことに価値を置く相互独立的自己観が影響し、自己奉仕的な帰属が行われるのに対し、日本などのアジア社会では個々人の資質が優れていることよりも自己のあり方を周囲と調和するように調整しようとする相互協調的自己観が影響し、自己批判的な帰属が行われるのである。

文化的自己観は、それが共有された社会に住む人びとの認知や行動プロセスの基礎となるだけで

はなく、その社会の中で作られる言語用法、社会的慣習や制度の基礎ともなっている。たとえば、欧米社会の相互独立的自己観は常に「Ｉ」という同一の一人称名詞を使い続ける言語慣習や、自己の独自性の主張を強調する教育方法の基礎となっている。一方、東アジアの相互協調的自己観は会話の相手との関係によって「わたし」「わたくし」「おれ」など一人称代名詞を使い分ける言語慣習や、他者の気持ちを推し量ることを強調する教育方法などの基礎となっている。このように、文化的自己観が反映された慣習や制度などの社会的現実は、その中で育てられ生きていく人びとの心の働きを形成する基礎となる一方で、その人びとが社会的現実を作り出すといった相互影響関係、すなわち心と文化の相互構成が存在するのである。

文化的自己観は、人の動機づけにも影響する。一般的に、人は自己による選択や決定の知覚において内発的動機づけが大きく影響するとされている。しかし、相互独立的なアングロ系文化では自己の選択によって強く動機づけられるため、その子どもたちは自分で選んだ課題に対してより長く取り組んで良い成績を残したのに対し、相互協調的なアジア系文化では重要な他者の選択によって強く動機づけられるため、その子どもたちは母親が望む課題に対してより長く取り組んで良い成績を残すことが示されている。このように、人の内発的動機づけは発達の早い段階から文化的自己観に媒介されるのである。また、相互独立的自己観が優勢な文化では自己の望ましい内的属性を確認したときに課題に対する動機づけが高まるのに対し、相互協調的自己観が優勢な文化では自己の不足を認識したときに動機づけが高まるとされている。この文化差は、自己確認を重視する前者において人は自己を肯定する機会を求めるように動機づけられているのに対し、その社会がもつ特性への適応が重視される後者において人は自己の欠点の克服に動機づけが奨励されてきたために生じたと考えられている。実際、関係性が重視される相互協調的自己観の優勢な日本文化では、発達過程を通して「大学生らしく振舞わなければならない」などの規範と現実の自己との差を認識させられる機会が非常に多いが、これは自己を規範に適応させることが奨励されているからである。日本において、自己の至らない点を「反省」してそれをなくすための「努力」が行われるのは、相互協調的自己観を根本とする文化の慣習であると同時に、その文化が関係性に寄与するような認知や行動、情動を強化し、相互協調的自己観を育むような機能を持っているのである。

２）異文化適応と文化変容

人間の存在は生物学的要因、文化的要因、個人的要因の３つの側面からとらえることができ、発達はこれらの要因が相互に作用する過程とみなすことができる。これら３要因からの相対的影響力は人の一生の各段階において異なり、文化的影響が大きくなるのは思春期以降とされている。つまり、ある文化に育ち、ある意味体系を獲得しつつある青年が途中で別の文化社会へ身を移した場合、別の意味体系に従ってその異文化に適応して生きることを求められ、その影響力は大きいと考えられる。今日、グローバル化や多文化共生が進む中で、文化を超えた交流はさまざまなレベルで行われるようになってきた。われわれの周囲でも外国で暮らす日本人、反対に外国からやって来て日本で暮らしている人は珍しくなくなってきている。その一方で、異文化適応がうまくいかず、ストレスのために心身にさまざまな症状をきたしたり、結果的に自国に帰国してしまったりする例もみられる。異文化の環境では、われわれがそれまで身につけてきた社会的相互作用のサインやシンボル、ルールが成立しないことに加え、もっていたさまざまなネットワークから切り離された状態であり、自己防衛のために自文化中心主義な判断をしてしまうことが多い。異文化接触は、文化を極化的にとらえるのではなく、今まで知らなかっ

た他者を知る機会であり、当然であると考えていた自己や自分の価値観、立場を改めて知る機会であるといえよう。

山岸（1998）は、日本人はアメリカ人よりも「人間は一般的に信頼に足る存在か」という一般的信頼の程度が低いことに着目し、その原因として社会構造の違いを指摘した。日本社会は、伝統的に集団主義的な社会構造が存在し、戦後に広がった終身雇用制度や系列取引に代表されるように、人びとを同一の集団に長期間とどめ、よそ者を受け入れない社会関係が閉じているという特徴があった。そのため、人びとは現在所属する集団や社会関係の外で新しい関係を作る機会が制限されており、外部に新たな機会を求めなくても損をしない状況であった。このような機会構造の下では、一般的信頼、つまり知らない他者を信じてみよう思う心の働きは特に必要とされなかった。これに対し、アメリカ社会はよそ者を受け入れるように社会制度が作られた開かれた社会であった。そのため、現在より大きな報酬をもたらす可能性がある人や集団を外部に発見したら、すぐにそちらに移ることを検討することが得策であった。このような機会構造の下では、高い一般的信頼をもち、知らない人びとを信じるに足る人間であるとまずは考える心の働きが必要である。山岸（1998）は、このような異なる機会構造を持つ社会にそれぞれ適応した結果、日米間の一般的信頼に差が生じたと結論づけた。この考え方は、人の心が周囲の社会環境から最大限の報酬を得るように適応的に作られているはずであり、特定の心の仕組みや行動傾向は社会的環境への適応から生じることを推論している。社会的現実は、人がそれぞれ自己利益を追求し、複雑な相互交渉を繰り広げた結果として意図せずに生じるものであり、われわれの心もその社会的現実へ適応していくことが推測される。つまり、心と社会や文化の関係は、両者が相互影響し合った結果生じた均衡状態であり、グローバル化や多文化共生が進んで日本社会がより開かれていくことは、日本人が高い信頼を身につけていくことに結びつくであろう。

異なる文化を持った集団が継続的、直接的に接触し、結果としてその双方あるいはいずれかの集団の独自な文化的パターンが変化するような結果が生じる現象のことを文化変容という。その方向性として、「同化」「統合」「分離」「境界化」の4つがあげられる。同化とは、その人の文化的アイデンティティや特徴が保たれておらず、相手文化集団との関係性が保持されている状態である。統合とは、その人の文化的アイデンティティや特徴が保たれていて、相手文化集団との関係も保持されている状態である。分離とは、その人の文化的アイデンティティや特徴が保たれているが、相手文化集団との関係が保持されていない状態である。境界化とは、その人の文化アイデンティティや特徴が保たれておらず、かつ相手文化集団との関係も保持されていない状態である。このような現象は、集団だけでなく個人内にも生じることがあり、心理的文化変容とよばれている。

3）群馬県の異文化状況

群馬県における外国人登録者数は、この20年間で約10倍となり、飛躍的に増加した。1980年代半ばまでは、登録者数は3～4,000人台で推移してきたが、1990年の出入国管理及び難民認定法の改定を契機に大きく変わった。過去3回の国勢調査を中心に、その変遷についてみてみる。

2000年（平成12年）の国勢調査では、群馬県の総人口は2,024,852人で、5年間に21,312人増加しており、1.1％の増加率である。外国人人口は28,539人で、総人口に占める割合は1.41％であり、前回よりも32.0％増加している。市町村別に見ると、伊勢崎市が5,422人と最も多く、次いで大泉町が4,918人、太田市が4,409人、前橋市が2,506人となっている。総人口に占める外国人人口の割合は大泉町が最も高く11.88％となっており、次いで伊勢崎市が4.31％、太田市が2.98％となっている。

国籍別に見ると、ブラジルが11,591人で40.6%、ペルーが3,107人で10.9%、フィリピンが2,874人で10.1%、中国が2,809人で9.8%、韓国・朝鮮が2,790人で9.8%である。ブラジルが40%と半数近くを占めている。ペルー、フィリピン、中国、韓国・朝鮮がそれぞれ10%前後を占めている。国籍別に市町村の割合を見ると、ブラジルが高いのは境町が82.1%、大泉町が74.6%、千代田町が56.5%、太田市が52.3%、伊勢崎市が42.5%、草津町が39.1%、藪塚本町が34.3%となっている。ペルーが高いのは伊勢崎市が25.3%、赤堀町が21.6%、藪塚本町が14.6%、大泉町が13.5%となっている。フィリピンが高いのは昭和村が18.5%、赤堀町が15.8%、藪塚本町が13.1%、伊香保町が12.7%、太田市が11.2%となっている。中国が高いのは昭和村が74.8%、伊香保町が14.1%、草津町が13.9%となっている。韓国・朝鮮が高いのは草津町が27.2%、伊香保町が14.1%となっている。ブラジル・ペルーは伊勢崎市や太田市の近辺など東毛地区に多く、中国は昭和村が非常に多い。ほかに伊香保や草津といった温泉街の地域が多くなっている。

2005年（平成17年）では、群馬県の総人口は2,024,135人で、５年間で717人減少し、率にすると0.0%とわずかながらの減少である。外国人人口は34,934人で、総人口に占める割合は1.73%となり、前回よりも22.4%増加している。市町村別に見ると、伊勢崎市が8,738人と最も多く、次いで太田市が6,433人、大泉町が6,076人、前橋市が3,222人と、ほぼ前回と同様の結果となっている。総人口に占める外国人人口の割合は、大泉町が前回の調査に続き最も高く、14.65%となっている。国籍別に見ると、ブラジルが12,805人で36.7%、中国が4,448人で12.7%、ペルーが3,979人で11.4%、フィリピンが3,927人で11.2%、韓国・朝鮮が2,652人で7.6%である。ブラジルの割合は約４%減少したが、ペルーは0.5%増加している。中国の割合が３%近くも増え、ブラジルに次いで第２位となっている。フィリピンも１%増加しているが、韓国・朝鮮が約２%減少している。国籍別に市町村の割合を見ると、ブラジルが高いのは大泉町が66.4%、草津町が48.1%、太田市が46.9%、伊勢崎市が42.9%、玉村町が38.1%、千代田町が30.0%となっている。中国が高いのは昭和村が78.4%、新町が48.8%、伊香保町が31.6%、館林市が30.7%となっている。ペルーが高いのは伊勢崎市が23.5%、大泉町が12.8%となっている。フィリピンが高いのは伊香保町が33.3%、玉村町が21.3%、館林市が17.6%、千代田町が13.9%、草津町が12.7%、太田市が10.8%となっている。韓国・朝鮮が高いのは新町が28.7%、草津町が16.5%、伊香保町が10.5%となっている。ブラジル・ペルーは前回同様、伊勢崎市や太田市の近辺など東毛地区に多く、中国は昭和村が非常に多く、新町にも多くなっている。前回と同様に伊香保や草津といった温泉街の地域が多くなっている。

2010年（平成22年）の国勢調査によると、群馬県の総人口は2,008,068人で、５年間で15,928人減少し、率にして0.8%減となった。外国人人口は、35,458人で、総人口に占める割合は1.77%であり、前回の2006年よりも0.04%増加している。市町村別に見ると、伊勢崎市が8,419人と最も多く、以下太田市が7,000人、大泉町が5,223人、前橋市が3,742人となっている。総人口に占める外国人の割合は大泉町が前回に続き最も高く、12.97%となっている。国籍別に見ると、ブラジルが11104人で31.3%、中国が5801人で16.4%、フィリピンが4,540人で12.8%、ペルーが3,804人で10.7%、韓国・朝鮮が2,562人で7.2%である。前回、前々回と同様にブラジルが第１位で30%強を占めているが、前回に比べ約５%の減少である。第２位は前回と同じく中国で16.4%と約４%近く増えている。フィリピンが第３位で前回よりも1.6%の増加を示している。ペルーは前回よりも0.7%の減少で、前々回を同じくらいとなっている。韓国・朝鮮は0.4%の減少を示している。国籍別に市町村の

割合を見ると、ブラジルが高いのは大泉町が70.4%、太田市が41.4%、千代田町が38.4%、伊勢崎市が36.3%、草津町が36.2%、玉村町が35.6%、館林市が13.3%となっている。中国が高いのは昭和村が79.4%、嬬恋村が75.0%、草津町が27.0%、館林市が26.9%、桐生市が20.3%となっている。フィリピンが高いのは桐生市が22.7%、館林市が17.6%、玉村町が17.1%、太田市が13.9%、千代田町が13.1%、となっている。ペルーが高いのは伊勢崎市が24.5%、大泉町が12.6%、桐生市が11.7%となっている。韓国・朝鮮が高いのは草津町が15.3%、桐生市が12.4%となっている。ブラジル・ペルーは前回同様、伊勢崎市や太田市の近辺など東毛地区に多く、中国は昭和村が非常に多く、それと同じくらい嬬恋村も多くなっている。今回桐生市に外国人が増えているように思われるのは、合併の影響であろう。

2011年（平成23年）12月末での外国人登録者数を見ると、登録者数は42,233人であった。2010年の12月末と比較すると、1,214人の減少で、2.8%の減である。市町村別の登録者数は、第1位が伊勢崎市で10,443人（24.7%）、第2位が太田市で7,249人（17.2%）、第3位が大泉町で6,237人（14.8%）、第4位が前橋市で4,395人（10.4%）、第5位が高崎市で4,191人（9.9%）であった。前回調査と同じ順位であり、これら上位の5市町で登録者全体の77.0%（32515人）を占めている。国籍別の登録者数は、第1位がブラジルで13,077人（31.0%）、第2位が中国で7,484人(17.7%)、第3位がフィリピンで5,989人（14.2%）、第4位がペルーで4,749人（11.2%）、第5位が韓国・朝鮮で2,864人（6.8%）であった。括弧内は、外国人登録者数全体に占める比率である。前回調査と同じ順位であり、これら上位5カ国で登録者全体の80.9%（34,163人）を占めている。国勢調査の数値と多少の違いはあるものの、傾向はほとんど同じであると思われる。伊勢崎市、太田市、大泉町の上位3位市町に外国人登録者数の半数以上が居住しているのである。

これらの外国人はそれぞれ個別に居住しているのではなく、集団で居住しているところから、それぞれの市町で独自の雰囲気というか文化を形成している。当然日本人との間にもさまざまな関係が生じてきて、問題となることもある。異文化摩擦と言っても過言ではないであろう。摩擦や問題を起こすのではなく、共生することを模索することが大切になってくる。群馬県は、2012年に「群馬県多文化共生推進指針」を定めて、外国人との共生を推進するための方向性を示している。

外国人県民の状況と課題として、登録者数の増加、多様化についてと、群馬県と取組と課題が述べられている。登録者数の増加については前述の通りであり、多様化については、次のように述べられている。「在留資格別に見ると、南米日系人の多くに認められている在留資格である「定住者」、「日本人の配偶者等」、「永住者」が全体の71.15%を占めているが、近年は「研修」「技能実習」が増加傾向にあり、従来外国人の少ない農村部では外国人研修・技能実習制度により在留する中国人などが増えている地域もある」、「年齢別に見ると、県全体では主たる労働力人口である20代から40代までが圧倒的に多く、外国人が県内産業の担い手となっていることを示めしている。また、学齢期の児童・生徒を含む10代までの人口も依然として多く、教育制度の整備が必要である」、「国別に見ると、特にブラジル人では0～19歳までの登録者が3500人以上おり、家族での来日、定住、あるいは単身者同士の婚姻による家族の形成など生活者として滞在しているものが多く、地域で生活していく上での教育や保健、医療、福祉面などでの対応がいっそう必要になってきたことを示している」。

群馬県の取組として、次のように述べている。「2004年「外国人と共生するまちづくりプロジェクト」を設置して、多文化共生に向けて今後の施策のあり方について検討を行い、その結果、翌2005

年全国に先駆けて「多文化共生支援室」を設置した」、「警察本部においても、2007年６月、「来日外国人共生対策指針」を策定し、対策を展開するなど、多文化共生への取組は広がりを見せている」、「しかしながら、こうした県や市町村の施策にもかかわらず、外国人県民の集住化、定住化が急速に進む中で、教育、医療、地域住民との摩擦など課題は多様化しており、一層の施策の推進が求められている」、「県では、2007年10月に以下の３項目を柱とした「群馬県多文化共生推進指針」を策定し、総合的な多文化共生施策に取り組んでいるところである。「１．県民の多文化共生への理解を深める」「２．外国人県民の自立と社会参画を進めるための環境を整備する」「３．多文化共生を推進するための体制を整備する」」。

群馬県の取り組む課題として、次のように述べている。「多文化共生を推進するに当たっては、外国人の受け入れに関して基本的な責任を有する国の方針の確立や法制度の整備が前提であり、まず国における総合的な取り組みが求められる」、「国においては、2010年８月に内閣府が「日系定住外国人施策に関する基本方針」を策定し、さらにそれに基づき各省庁が2011年３月に「日系定住外国人施策に関する行動計画」を策定した」、「群馬県が2010年度に「定住外国人実態調査」を実施したところ、厳しい雇用情勢の一方で日本への定住化志向の増加が顕著であり、日本語の学習意欲の高さ、正確な情報伝達の重要性が見て取れ、これらのへの対応が喫緊の課題となっている」、「多文化共生は集住地域だけの固有の課題として理解されがちであるが、グローバル化が進んでいる今日、外国人の少ない地域にあっても異なる文化との接触は日常的に生じており、多文化共生の推進は決して無縁なことではない」とまとめられている。

10代の子どもたちや20代の青年たちが、異文化社会の中でどのように生活していくのかということを、教育、医療、福祉面でしっかりとサポートしていくことが、これからの彼らの生活がどのようになされていくのかということと深く関わってくるので、多文化共生の推進は必要かつ大切なことである。

４）異文化接触が友人関係や異文化受容態度に及ぼす影響

異文化との接触は、現代青年の友人関係や異文化に対する態度にさまざまな影響を及ぼすことが指摘されている。

現代青年の友人関係において、相手への「気遣い」や他者や集団への「配慮」、お互いの「プライバシー」を重視する傾向がみられるが、異文化との接触はコミュニケーションの中での「笑い」が大きな意味を持つことを知るため、友人関係のコミュニケーションに「笑い」を加えることでその関係を維持し、発展させようとしている（泉水・小池，2011ｂ）。

泉水・小池（2012ａ）は、異文化との接触が異文化受容態度を促進させ、社会的アイデンティティの認知や自己アイデンティティの獲得、公平な世界観の確認につながり、異文化に対するポジティブな態度を形成するとともに、その親密な関係がコミュニケーションを通して意識的配慮を活性化し、自己概念やアイデンティティの獲得にポジティブな影響を及ぼすことを推測した。一方で、現実社会の偏見や差別に対して公平な世界観を維持しようとするためにアンビバレント・ステレオタイプをもつ可能性も示唆した。また、異文化接触がアイデンティティや自己概念の獲得、異文化への否定的ステレオタイプ、二項対立概念をもつことを促進させることが友人関係への動機づけにネガティブな影響を及ぼすとともに、国際化や多文化共生から生じる価値観の多様性が社会的自己の確認やアイデンティティの獲得にネガティブな影響を及ぼすことを示唆した。これに対し、異文化との未接触が自己概念やアイデンティティの獲得のために多様な他者との関係をもつように動機づけ、非ステレオタイプ的認知によって多様な集

団や他者への柔軟に対応することを促進し、友人関係への動機づけを高めることを示した。さらに、異文化との親密な関係やコミュニケーションは意識的配慮を活性化させて他の友人関係に対してもポジティブな影響を及ぼし、社会的アイデンティティや多面的な自己アイデンティティの獲得につながると同時に、正確な対人認知への動機づけを高めて関係の発展や維持にもポジティブな影響を及ぼし、公平な世界観を脅かすアンビバレント・ステレオタイプを解消するために友人関係への満足感が高めることを推測した。また、異文化受容態度の高さは他者への意識的配慮を高め、友人関係、特に「気遣い」への意識を高めることを示し、このことがその動機づけや満足感も高めることが示されている（泉水・小池，2012ｂ）。

５）本研究の目的

以上のことから、居住している地域社会の異文化状況が自己や認知、行動に大きく影響することが推測される。特に、青年期には異文化に接触することによって生じる異文化適応が文化的自己観を変容させ、友人関係や異文化理解に大きな影響を及ぼすことが考えられる。

本研究は、群馬県内出身者と群馬県外出身者の異文化受容態度、異文化理解に関する意識に加え、友人関係やその動機づけについて検討し、異文化と共生する社会に居住することが現代青年の異文化への態度や意識、また友人関係に及ぼす影響について検討することを目的とした。

２．方　法

１）調査対象者

大学生・短期大学生・高校生計533名（男子186名、女子347名、平均年齢18.9歳）

２）調査内容・項目

⑴　異文化への態度：自国と外国への態度尺度（向井ら，2003）25項目について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。

⑵　異文化理解に関する意識：異文化理解尺度（沼田，2011）29項目について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。

⑶　友人関係尺度：友人関係尺度（岡田，1999）17項目について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。

⑷　友人関係への動機づけ：友人関係への動機づけ尺度（岡田，2005）16項目について、「非常にあてはまる⑸」から「全くあてはまらない⑴」まで、５件法で回答を求めた。

⑸　フェイスシート項目：所属学科、学年、性別、年齢、出身地

３）調査時期

2010年７月～2011年２月に実施した。

３．結　果

１）異文化への態度と意識

表１は、自国と外国への態度尺度得点について、群馬県内出身者と群馬県外出身者の平均値と標準偏差（SD）を因子ごとにまとめたものである。２（出身地）×４（因子）の分散分析を行った結果、因子の主効果において有意差がみられた（$F(3, 2132)=275.53$，$p<.001$）。下位分析の結果、「外国人拒否」よりも「異文化接触」「異文化援助」「愛国心」が高く、「愛国心」より「異文化接触」「異文化援助」が高いことが明らかとなった。また、交互作用においても有意差がみられ（$F(3, 2132)=10.44$，$p<.001$）、「異文化接触」「愛国心」「外国人拒否」において群馬県内出身者より群馬県外出身者が高いのに対し、「異文化援助」において群馬県外出身者より群馬県内出身者が高いこと

表１　自国と外国への態度尺度平均

			因　子				
			異文化接触	愛国心	外国人拒否	異文化援助	計
出身地	群馬県内	平均値	3.74	3.57	2.57	3.81	3.42
		SD	0.64	0.69	0.52	0.90	0.69
	群馬県外	平均値	3.86	3.65	2.75	3.54	3.45
		SD	0.62	0.73	0.57	0.91	0.71
	計	平均値	3.80	3.61	2.66	3.68	3.44
		SD	0.63	0.71	0.55	0.91	0.70

表２　異文化理解に関する意識尺度平均

			因　子					
			少数派への関心	多様な価値観	社会変化への不安	自己の社会的立場	自己中心的理解	計
出身地	群馬県内	平均値	2.81	3.70	2.83	3.29	2.78	3.08
		SD	0.46	0.50	0.48	0.49	0.50	0.48
	群馬県外	平均値	2.90	3.79	2.96	3.35	2.82	3.16
		SD	0.49	0.55	0.54	0.51	0.60	0.54
	計	平均値	2.85	3.75	2.89	3.32	2.80	3.12
		SD	0.48	0.52	0.51	0.50	0.55	0.51

が分かった。

表２は、異文化理解に関する意識尺度得点について、群馬県内出身者と群馬県外出身者の平均値と標準偏差（SD）を因子ごとにまとめたものである。２（出身地）×５（因子）の分散分析を行った結果、出身地の主効果において有意差がみられた（$F(4, 2665)=16.81$, $p<.001$）。表２より、群馬県内出身者より群馬県外出身者が高いことが分かった。また、因子の主効果においても有意差がみられ（$F(3, 2132)=326.13$, $p<.001$）、下位分析の結果、「自己中心的理解」「少数派への関心」「社会変化への不安」よりも「自己の社会的立場」「多様な価値観」が高く、また「自己の社会的立場」より「多様な価値観」が高いことが明らかとなった。

２）友人関係

表３は、友人関係尺度得点について、群馬県内出身者と群馬県外出身者の平均値と標準偏差（SD）を泉水・小池（2011ａ）で得られた因子ごとにまとめたものである。２（出身地）×５（因子）の分散分析を行った結果、出身地の主効果において有意差がみられた（$F(1, 2665)=4.55$, $p<.05$）。表３より、群馬県内出身者より群馬県外出身者は高いことが分かった。また、因子の主効果において有意差がみられ（$F(4, 2665)=124.29$, $p<.001$）、下位分析の結果、「気遣い」「プライバシー」「群れ」「他者配慮」「笑い」の順に高いことが明らかとなった。さらに、交互作用においても有意差がみられ（$F(4, 2665)=2.85$, $p<.05$）、「群れ」においてのみ群馬県外出身者より群馬県内出身者は特に高いことが分かった。

表４は、友人関係の動機づけ得点について、群馬県内出身者と群馬県外出身者の平均値と標準偏差（SD）を因子ごとにまとめたものである。２（出身地）×４（因子）の分散分析を行った結果、出身地の主効果において有意差がみられた（$F(1, 2132)=4.31$, $p<.05$）。表４より、群馬県外出身

表３　友人関係尺度平均

			因　子					
			群　れ	他者配慮	笑　い	プライバシー	気遣い	計
出身地	群馬県内	平均値	3.70	3.43	3.08	3.78	3.94	3.59
		SD	0.71	0.56	0.62	0.68	0.58	0.63
	群馬県外	平均値	3.50	3.52	3.00	3.74	3.89	3.53
		SD	0.85	0.60	0.73	0.82	0.64	0.73
	計	平均値	3.60	3.48	3.04	3.76	3.92	3.56
		SD	0.78	0.58	0.67	0.75	0.61	0.68

表４　友人関係への動機づけ尺度平均

			因　子				
			外　的	取り入れ	同一化	内　発	計
出 身 地	群馬県内	平均値	2.72	3.55	4.20	4.53	3.75
		SD	0.59	0.76	0.64	0.58	0.64
	群馬県外	平均値	2.80	3.47	4.14	4.34	3.69
		SD	0.64	0.81	0.63	0.66	0.68
	計	平均値	2.76	3.51	4.17	4.43	3.72
		SD	0.61	0.78	0.63	0.62	0.66

者より群馬県内出身者が高いことが分かった。また、因子の主効果において有意差がみられ（$F(4, 2132)=643.62$，$p<.001$）、下位分析の結果、「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の順に高いことが明らかとなった。さらに、交互作用においても有意差がみられ（$F(4, 2132)=3.81$，$p<.01$）、「内発」において群馬県外出身者より群馬県内出身者は特に高いのに対し、「外的」において群馬県外出身者は群馬県内出身者よりも高いことが分かった。

４．考　察

１）異文化への態度と意識

表１より、群馬県内出身者と群馬県外出身者の自国と外国への態度尺度得点について分散分析を行った結果、因子の主効果において有意差がみられ、「外国人拒否」よりも「異文化接触」「異文化援助」「愛国心」が高く、「愛国心」より「異文化接触」「異文化援助」が高いことが分かった。このことから、現代青年は異文化と接触し、それを援助しようとする態度が高いことが明らかとなった。これは、グローバル化や多文化共生が進んだ現代においては異文化との接触が多いため、泉水・小池（2012ａ）が指摘したように「異文化と接するのは良いことである」や「異文化を自己の中に取り入れることは良いことである」といった認知が生み出され、異文化受容に対する積極的な態度が促進されたことが考えられる。また、そのような社会ではアメリカ社会と同様によそ者を受け入れるような社会制度が作られるため、他者に対する高い一般的信頼をもち、知らない人びとを信じるに足る人間であるとまずは考える心の働きが生み出され、異文化に接触しようとしたり援助しようとしたりする態度が形成されるのではあろう。このような態度は、山岸（1998）が指摘したように人の心が周囲の社会環境から最大限の報酬を得るように適応的に作られており、心の仕組みや行動傾向が社会的環境への適応から生じることを証明するともいえよう。つまり、グローバル化

や多文化共生がすすんで日本社会がより開かれていくことによって、心と社会や文化の関係が相互影響し合った結果として均衡状態を生み出し、日本人も他者に対する高い信頼を身につけていくことが推測される。さらに、異なる文化を持った集団が継続的、直接的に接触するとその双方あるいはいずれかの集団の独自な文化的パターンが変化する文化変容が生じるとされている。調査結果において、「愛国心」とともに「異文化接触」や「異文化援助」が高かったのは、文化変容の方向性が統合の状態であると考えられる。統合とは、自分の文化的アイデンティティや特徴が保たれていて相手文化集団との関係も保持されている状態である。現代の青年は、これまで育ってきた文化からの影響をしっかりと保ちつつも異なる文化の特徴も理解し、その中の人びととバランスのとれた関係を築いているのであろう。

また、交互作用においても有意差がみられ、「異文化接触」「愛国心」「外国人拒否」において群馬県内出身者より群馬県外出身者が高いのに対し、「異文化援助」において群馬県外出身者より群馬県内出身者が高いことが分かった。群馬県は、他の地域に比べて多国籍の人びとが多く、異文化が身近な社会であるといえる。そこでは、困っている多国籍の人が身近に存在し、それに対して援助しなければならない状況、あるいは援助した経験も多いであろう。そのため、他の地域と比べて異文化を援助しようとする態度が高くなったのではないか。これに対し、群馬県外出身者において異文化と接触しようとし、愛国心を強く持ち、外国人を拒否する態度が高かったのは、異文化との接触が日常的に少ないため、異文化と接触したいという動機が高まってその態度を高めるとともに、自国や自文化へのポジティブな態度が高まり、愛国心を持ったり外国人を拒否したりする態度が高くなったことが推測される。これらの結果は、異文化と共生する社会に居住し、異文化と接触する頻度が高いかによって異文化に対する態度に影響することを証明しているといえよう。一方で、異文化と日常的に接触していても日本社会で共有されている相互協調的自己観が影響していることも考えられる。相互協調的自己観とは、自己とは他の人や周りのものごとと関係性をもった存在であるとする自己観である。群馬県といった異文化と共生する社会においても他者との関係を重視した日本人特有の自己観をもつことが、異文化援助の態度形成にポジティブな影響を及ぼすとともに愛国心や外国人拒否の態度を低めているのではないだろうか。この相互協調的自己観は、周囲の人々からの期待に沿って自分の欠点を改善していくために自分の至らない点を反省するため、自分の成功を外的要因に帰属させる一方で失敗は内的要因に帰属させ、自己の価値を減じるような自己批判的傾向が強くなるとされている。自己批判的傾向は、異文化と接触する機会が多くなると異文化の長所を知る機会が増えるとともに自文化の短所に対して批判的に考えることにつながるため、愛国心を低めることにも影響するのであろう。

表２より、群馬県内出身者と群馬県外出身者の異文化理解に関する意識尺度得点について分散分析を行った結果、出身地の主効果において有意差がみられ、群馬県内出身者より群馬県外出身者が高いことが分かった。このことから、群馬県のように異文化と共生する社会に居住すると異文化と実際に接触する機会も多いため、自ら積極的に異文化と接触しようとする動機や理解しなければならない意識が起こらなくなると考えられる。これに対し、群馬県以外のように異文化と共生しない社会に居住すると異文化と接触する機会があまりないため、グローバル化や多文化共生がすすむにつれて異文化と接触しようとする動機や理解しなければならない意識が高まるのであろう。また、群馬県に居住することによって、文化変容は「統合」の方向性で行われていることも考えられる。異文化と共生する社会では、幼い頃からさまざまな場面で異文化との適応が必要とされることが多

い。そのため、自分の文化的アイデンティティや特徴は保たれながらも相手文化集団との関係も保持されている統合の方向性で文化変容が行われているため、あえて異文化接触への意識や理解への動機づけは起こらないと思われる。一方、群馬県外では異文化との適応が必要とされた経験が少なく、まだ不十分ある。そのため、現在の文化変容は自分の文化的アイデンティティや特徴は保たれているが相手文化集団との関係が保持されていない分離であるため、これから統合の方向性ですすめていくことを目指して、異文化への意識が高めていくためには異文化への意識や理解への動機づけを高めることが必要であるのであろう。

また､因子の主効果においても有意差がみられ、「自己中心的理解」「少数派への関心」「社会変化への不安」よりも「自己の社会的立場」「多様な価値観」が高く、また「社会的立場」より「多様な価値観」が高いことが分かった。これは、現代の日本においてグローバル化や多文化共生がすすんでいることが影響していると考えられる。以前と比べ、現代では異文化と接触する機会が多く、さまざまな価値観に接触するようになってきたため、多様な価値観を理解しようと動機づけられると思われる。また、異文化適応によって知らない人びとを信じるに足る人間であるとまずは考える一般的信頼が生じるため、自己中心的な理解はせず、社会変化への不安もあまりないのであろう。一方で、調査対象者は発達段階では青年期にあたるため、アイデンティティの確立がその課題として存在している。日常生活の中で社会的アイデンティティを確認することは自己アイデンティティを確立することにつながるため、自己の社会的立場を再確認する必要性を感じているのではないか。しかし、グローバル化や多文化共生がすすみ、日本人の文化的自己観が相互協調的自己観から相互独立的自己観の特徴をもつことから生じる問題点も考えられる。われわれの社会が他者を受け入れるように制度化されると、現在より大きな報酬をもたらす可能性がある他者を発見したらそちらへ移ることを検討するようになる。このことは、人間関係を「損得」で判断することを示すものであり、現代の日本で必要性が認識されている「つながり」や「絆」のある人間関係はなかなか生み出されにくくなることも推測される。この両者の長所をうまく取り入れながら自己の文化的自己観を形成していくことが、異文化との接触が増えつつある日本社会では重要となっていくであろう。

2）友人関係

表３より、群馬県内出身者と群馬県外出身者の友人関係尺度得点について分散分析を行った結果、出身地の主効果において有意差がみられ、群馬県外出身者より群馬県内出身者は高いことが分かった。表３より、群馬県内出身者は「群れ」因子において特に高いことが明らかとなった。このことは、交互作用においても有意差がみられ、下位分析の結果として群馬県外出身者より群馬県内出身者は「群れ」因子が高いという結果からも明らかである。これは、群馬県という異文化が周囲に多く存在する社会では彼らが共有する相互独立的自己観を目の当たりにする機会が多いため、逆に日本人が共有する相互協調的自己観を確認するようになることが影響しているのではないか。相互協調的自己観は、自己は他の人や周囲のものごとと関係性をもつと考えるため、友人との群れ傾向を強めることにつながるのであろう。しかし、群れ傾向の高さは、自文化と異なる文化を排除しようとする危険性を含んでいることも考えられる。表３より、群馬県内出身者は他者配慮が低いことも明らかであるが、群馬県は異文化の多い社会であり、共生することが必要とされる社会であるため、自己と同様の特徴をもつ他者と群れるだけでなく、異なる他者に配慮していく努力が特に異文化との友人関係を良好的に行っていくためには必要であろう。一方、群馬県に居住することにより、異文化と適応する中で他者への一般的信頼

が高まることも推測される。見知らぬ他者でも信じようとすることは他者に対する余分な配慮をしなくなるだけでなく、文化変容においても統合へとすすんでいくことにつながるのではないか。

また、因子の主効果において有意差がみられ、「気遣い」「プライバシー」「群れ」「他者配慮」「笑い」の順に高いことが分かった。泉水•小池（2011ａ）では「気遣い」「笑い」「群れ」「プライバシー」「他者配慮」の順に高いことが示されているが、本研究ではそれを比べて友人への気遣いや群れを重視する傾向は同様に高いが、プライバシーを重視し、笑いは重視されないという結果になった。これは、友人関係において相手に深入りしないようにする傾向が高まってきていることを示しているものと思われる。福重（2007）は、現代青年の友人関係が全体的に希薄化しているのではなく、場面に応じて選択的に使い分けていることを指摘している。つまり、「友人との関係はあっさりしていてお互いに深入りしない」といった表面的な関わり行動の一面と、「意見が合わなかったときには納得がいくまで話し合いをする」といった積極的な関わり行動の一面があり、友人関係の中に希薄なものと親密なものとが混在しているとされている。しかし、グローバル化や多文化共生がすすんでいく中で異文化の友人関係を築くことが必要とされるようになると、相手と深く関わりたくても価値観の違いやコミュニケーションの難しさからその困難さを実感するようになり、他の友人関係においても相手を気遣い、プライバシーを重視する希薄化の傾向が強まってきているのではないだろうか。

表４より、群馬県内出身者と群馬県外出身者の友人関係の動機づけ得点について分散分析を行った結果、出身地の主効果において有意差がみられ、群馬県外出身者より群馬県内出身者が高いことが分かった。このことから、居住する地域社会に異文化が存在しているかどうかが友人関係への動機づけにも影響することが考えられる。群馬県は異文化が周囲に多く存在し、異文化と接触する機会も多い。上述したように、異文化と共生していくためには高い信頼感をもつことが必要であり、知らない他者であっても関わろうとする動機が高まることが推測される。そのため、友人関係においてもその動機づけを高めることにつながるのではないだろうか。

また、因子の主効果において有意差がみられ、「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の順に高いことが分かった。泉水・小池（2012ｂ）が指摘しているように、現代青年が友人との接触初期において、「おもしろい友人と楽しい時間を一緒に過ごす」ことを期待し、関係の成立、維持、発展について予測するため、そのような友人との関係を重視して「内発」が動機づけとして最も高くなったと推測される。また、友人関係を通した相手との「同一化」が自己アイデンティティの獲得にポジティブな影響を与えているため、その動機づけも高くなるのであろう。一方、国際化や多文化共生が進んだことで、周囲にはさまざまな特徴をもった他者が存在するようになってきている。自己や他者について画一的な認知や態度をもつ必要性がなくなり、「周囲からどのように見られるか」ではなく、「自分が誰と付き合いたいか」によって友人関係を選択しているため、「外的」や「取り入れ」が友人関係への動機づけとして低くなっているのであろう。

さらに、交互作用においても有意差がみられ、「内発」において群馬県外出身者より群馬県内出身者は特に高いのに対し、「外的」において群馬県外出身者は群馬県内出身者よりも高いことが分かった。これは、これまでも指摘してきたように異文化の存在や接触が相互独立的自己観という日本以外の文化で共有されてきた文化的自己観を取り入れるようになってきたことが影響していると考えられる。この文化的自己観は、成功に対しては内的帰属を行いやすいとされている。友人関係において良い経験、つまり良い友人関係を形成し

た経験があると、その理由を「自分の対人関係能力が高いから」や「自分が頑張ったから」ということに帰属すると思われる。そのため、新たな友人関係においても「友人と一緒にいるのは楽しい」や「友人と親しくなるのはうれしい」といった「内発」的な動機づけで成立させようとするのではないだろうか。これに対し、異文化があまり存在せず、接触の機会も少ない群馬県以外で居住すると相互協調的自己観を強く持っているため、成功に対して外的帰属を行いやすくなることが推測される。そのため、良い友人関係を過去に経験したとしても「周囲にいた友だちが良かった」や「自分に気を使ってくれた」ということにその理由を帰属するようになり、その後の新たな友人関係においても「一緒にいないと友人が怒る」や「友人の方から話しかける」といった「外発」的な動機づけで成立させようとするのであろう。

5．全体的考察

本研究は、群馬県内出身者と群馬県外出身者の異文化受容態度、異文化理解に関する意識に加え、友人関係やその動機づけについて検討し、異文化と共生する社会に居住することが現代青年の異文化への態度や意識、また友人関係に及ぼす影響について検討することを目的とした。

異文化への態度や意識に関しては、現代の日本ではグローバル化や多文化共生がすすみ、他者に対する一般的信頼が生み出されたため、外国人を拒否するよりも異文化と接触し、必要であれば援助したいという異文化に対する積極的な態度を持っていることが明らかとなった。これは、自分の文化的アイデンティティや特徴が保たれていて相手文化集団との関係も保持されている統合の方向性で文化変容が起きていることも影響していると考えられた。その中でも、群馬県内出身者が異文化を援助したいという態度を強く持ち、異文化との接触や共生が日常的に行われる環境に居住することがそのような態度を促進させることが推測された。また、群馬県といった異文化と共生する社会においても日本社会で共有されている他者との関係を重視した相互協調的自己観が影響したため、異文化を援助したいという態度の形成にはポジティブな影響を及ぼし、愛国心を高めたり外国人を拒否したりする態度の形成にはネガティブな影響を及ぼしていることも考えられた。一方で、群馬県内出身者は異文化理解に関する意識は低いことが明らかとなり、異文化との共生は実際に接触する機会も多いため、積極的に異文化と接触したり理解したりする意識が起こらなくなるとも推測された。上述したように、異文化と共生する社会ではさまざまな場面で異文化との適応が必要とされるため、統合の方向性で文化変容が行われていることも異文化接触への意識や理解への動機を低めているともいえよう。さらに、グローバル化や多文化共生がすすむことで従来よりも異文化と接触する機会が多くなり、多様な価値観との接触も増加したためにそれらを理解しようと動機づけられるとともに、異文化適応によって一般的信頼が生じるために自己中心的な理解をせず、社会変化への不安も少ないことが考えられた。しかし、社会変化とともに日本人の文化的自己観が相互協調的自己観から相互独立的自己観の特徴をもつようになると、人間関係を「損得」で判断し、つながりや絆のある人間関係は生み出されにくくなるため、それぞれの長所をうまく取り入れながら自己の文化的自己観を形成していくことが今後の日本社会では重要となっていくであろう。

友人関係に関しては、群馬県内出身者は全体的に高く、特に群れ傾向があることが明らかとなり、異文化と共生する社会においては彼らが共有する相互独立的自己観から生じる態度や行動を経験する多いため、自己のもつ相互協調的自己観を確認するようになることが影響していると考えられた。自己とは他の人や周囲のものごとと関係性をもつものであるとするこの文化的自己観が、友人

との群れ傾向を強めているのであろう。しかし、この群れ傾向が自文化と異なる文化を排除しようとすることにつながり、他者への配慮を低めていることが推測された。また、グローバル化や多文化共生がすすみ、異文化と共生する社会に居住することは友人関係への動機づけを促進させる一方で、異文化との友人関係でお互いの価値観の違いやコミュニケーションの難しさを経験し、深い付き合いのある関係を築くことの困難さを実感するため、友人関係において相手を気遣い、プライバシーを重視するといった希薄化の傾向が強まることも考えられた。このことは、「周囲からどのように見られるか」ではなく「自分が誰と付き合いたいか」を重視し、「友人と一緒にいるのは楽しい」や「友人と親しくなるのはうれしい」といった「内発」的な動機づけで友人関係を成立させようとすることにつながることも推測された。

本研究の結果は、異文化と共生する社会に居住することが文化的自己観や文化変容の方向性に影響を及ぼし、異文化への態度や意識、友人関係にも影響を及ぼすことを示唆している。しかし、本研究の調査対象者が居住する群馬県における外国人人口は全体の1.77％であり、「異文化と共生する社会」における特徴や影響を把握するためには、同様の異文化居住割合である他の地域に居住する青年との比較を行うことが必要であろう。また、群馬県内でも地域によって異文化居住割合が異なるため、地域ごとに分けて比較をすることも有効であろう。さらに、同じ地域に居住していても異文化との接触の程度や関係性が異なるため、接触の多さや関係の深さから検討していくことも異文化共生社会への居住が与える影響について正確に理解することにつながるであろう。

現代の若者は、まず個人があって、他者とつながってもお互いにしばらないという人間関係が得意であることを三浦（2011）は指摘している。それは「共同体」ではなく「共異体」的なものであり、消費者行動においてもシェア型といったつながりを求める行動や価値観を生み出している。たとえば、今までマイホームの個室に住んでいた若者がシェアハウスで他人と一緒に住むことを好む傾向もその人間関係の特徴から生まれているのであろう。自己と異なる文化をもつ他者と共異体的なコミュニティを形成していくことは、グローバル化や多文化共生がすすんでいく日本において、異文化と共生していくために必要な人間関係の１つであるといえよう。

引用文献

群馬県生活文化部国際課多文化共生推進係（2012）．群馬県多文化共生推進指針

群馬県統計課人口社会係（2001）．平成12年国勢調査第１次基本集計結果の概要（群馬県の確定人口）（http://toukei.pref.gunma.jp）

群馬県統計課人口社会係（2006）．平成17年国勢調査第１次基本集計結果の概要（群馬県の確定人口）（http://toukei.pref.gunma.jp）

群馬県統計課人口社会係（2011）．平成22年国勢調査人口等基本集計結果の概要（群馬県の確定人口）（http://toukei.pref.gunma.jp）

福重　清（2007）．変わりゆく「親しさ」と「友だち」－現代の若者の人間関係－　高橋勇悦他（編）　現代日本の人間関係　団塊ジュニアからのアプローチ　学文社 pp.27-61.

北山　忍（1998）．自己と感情－文化心理学による問いかけ－　認知科学モノグラフ　共立出版

三浦　展（2011）．シェアはヨコにもタテにもつながっていく　消費のニューノーマル　丸善出版，pp.123-129.

向井有理子・渡部美穂子（2006）．異文化受容態度：日・独・英の比較　向井有理子・渡部美穂子（編）　比較文化研究－日本・ドイツ・イギリス－　都市文化研究センター

沼田　潤（2011）．日本心理学会第75回大会論文集

岡田　涼（2005）．友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討－自己決定理論の枠組みから－　パーソナリティ研究，14，101-112.

岡田　努（1999）．現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について　教育心理学研究，47，432-439.

泉水清志・小池庸生（2011ａ）．現代青年の友人関係に及

ぼす要因　育英短期大学研究紀要，**28**，23-32.
泉水清志・小池庸生（2011ｂ）．　異文化接触と友人関係　日本心理学会第75回大会論文集
泉水清志・小池庸生（2012ａ）．　異文化接触が異文化受容態度と友人関係に及ぼす影響　育英短期大学研究紀要，**29**，25-42.
泉水清志・小池庸生（2012ｂ）．　異文化重要態度と友人関係　日本心理学会第76回大会論文集

（2012年11月30日　受付
2013年１月10日　受理）